国語科における思考力・判断力・表現力を身につけるための学び合い

新学習指導要領の特徴のひとつとして「読むこと」や「書くこと」の指導事項に「交流」が追加されたことがあげられる。このことは，「読む」「書く」のような言語活動においても他者との交流をともなった「学び合い」学習を行うことを求めるものとしてみることができる。

例「文章を読んで考えたことを発表し合い，一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。」

『小学校学習指導要領』国語科／第３学年及び第４学年「読むこと」(1)オ

自分が「思考・判断」したことを，他者と「表現」し合う「学び合い」学習を実現させることは，「思考力・判断力・表現力」を身につけるために重要であると考えられる。以下では，「読むこと」領域における「学び合い」学習を中心としながら，「学び合い」学習の意義と課題について述べてみたい。

(1)「読むこと」の学習に資するものとしての「学び合い」学習の意義

「読むこと」の学習においては，学習者はそれぞれ「自分自身の読み」を確立することを目指すことになる。ただし，それは自己完結していく方向で確立することを意味しない。この「自分自身の読み」は，初読の時点での「読み」を他の学習者の「読み」と照らし合わせながら「思考・判断」し，更新していくことによって作り上げられていくものである。「学び合い」学習は，他者の「読み」に触れ，自分の「読み」を問い直していくことに大きな意味があることを理解していく学習になる。

(2)「話すこと・聞くこと」「書くこと」に資するものとしての「学び合い」学習の意義

(1)のような「学び合い」学習を支えるのは，「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習において習得した力である。学習者は習得した力を活用しながら交流することで「自分自身の読み」を確立していく。その中で彼らは，「話し合いをうまく進めるためにはどうすればいいか」「わかってもらえるように書くためにはどのように書けばよいか」といった「自分自身の言葉の使い方」を意識する機会を得ることになる。この過程の中で，実際場面で活用できる力が身についていくのである。

上記(1)(2)の意義を達成する「学び合い」学習を成立させるためには，その学習を「何のため」に行うのかが，教師にとってはもちろん，学習者にとっても明確になっていることが必要である。目的が曖昧なまま形式的に「学び合い」を行っても，「自分自身の読み」の更新は起こらないし，「自分自身の言葉の使い方」を意識する動機は生まれない（「自分自身の言葉の使い方」への意識は，何らかの目的を達成しようとする時に活性化する）。

このように考えると，「学び合い」学習を行うためには，「問題発見」の過程が特に重要だということがみえてくる。自分たちはどのような問題に直面しているのか，そして，その問題はどのようにすれば解決できるのか。これらについて考えられていなければ，「何のため」の「学び合い」であるかは明確にはならない。

「初等部前期」であれば，問題は教師によって指し示され，学習者はそれを「自分たちの問題」として捉え，取り組んでいくことになる。このとき，教師は「問題発見」の過程を，学習者とともに進めることが大切である。学習者に芽生えた疑問を「確かに不思議だね」「かえるくんはどうしてこんなことをしたのかな」などといった声かけによってクラスで共有する「問題」へと昇華させるのである。

「初等部後期」や「中等部」においては，学習者自身が「問題発見」し，その解決のための方法を考えられるようになっていく必要がある。彼ら自身が「学び合い」学習の目的と効果を意識し，時には自ら「この問題について考えるためには何をテーマにしてどのように話し合えばいいだろうか」などと，「学び合い」学習の形態について思考する機会を，教師は作らなければならない。自ら「学び合い」をデザインする主体としての学習者を育てることが，真の意味での「学習者」を育てることにつながるはずである。

（共同研究者：島根大学教育学部初等教育開発講座　冨安　慎吾）